

簡易な調査方法による特色ある教育プログラム参加生徒の特徴把握  
～高校1年次から2年次にかけての学習意欲の質の変容から～

Understanding the Characteristics of Students Participating in the Featured Education Program Using a Simple Assessment Tool : From the Change in the Quality of Motivation to Learn between the First and Second Years of High School

伊田勝憲 IDA Katsunori

### 1. 問題と目的

本稿では、高校生の学習意欲の質を捉える簡易な調査方法として、項目数の少ない質問紙法を用いて、特色ある教育プログラムに参加した生徒の特徴把握が可能かどうかの検討を試みる。具体的には、Vansteenkiste, Lens, & Deci (2006)の目標内容理論 (Goal Contents Theory) や Oyserman (2007) のアイデンティティに基づく動機づけ (identity-based motivation) の考え方及び Duriez, Luyckx, Soenens, & Berzonsky (2012) によるアイデンティティスタイルと目標内容との双方向的な関係等に依拠しつつ作成した「目標内容志向性」に関する4項目 (外発的目標志向, 内発的目標志向, 自由志向, 模索志向) と, Eccles & Wigfield (2020) の期待-価値理論に依拠して作成した「課題価値」に関する4項目 (興味価値, コスト, 獲得価値, 利用価値) の計8項目による測定の実践面での有用性を探索することを目的とし, 2年間の縦断データの分析を行う。

各項目が測定しようとする概念の定義や理論的な背景, そして簡易な調査方法の開発を行った経緯については, 伊田 (2018, 2022, 2023) にまとめられている。開発の経緯のみ端的に記すと, 従来の心理測定尺度が複数の項目によって下位尺度を構成しているために, 似たような質問が繰り返されているように感じたり, 項目数に応じて回答に相当の時間を要したりするなど, 回答者の負担感が大きいこと, また, 実施者にとっても実施時間の確保やデータの整理・分析に要する作業等の負担軽減ニーズがあると考えられることが挙げられる。

実際に開発した8項目については, 伊田 (2023) において2年間の縦断調査データの分析を行い, 1項目ずつの簡易な測定であっても, 回答の安定性が見られていた。加えて, 特定の学科の生徒においては, 同一項目 (内発的目標志向) の数値が大きく変容したり, 当該項目の1年次と2年次の相関が弱かったりしたことから, 実際の教育活動の効果を捉えている可能性があることも示唆されていた。しかしながら, 効果をもたらしていると考えられる教育活動を特定していたわけではなく, 所属学科ごとの特徴から推測にとどまっていた。

そこで, 今回は, 2年間の縦断調査に基づくデータにより, 特色ある教育プログラムに参加した生徒と参加していない生徒の違いを捉えることができるかどうかを検討する。伊田 (2023) では1年次の夏と2年次の夏に調査を行っていたが, 特色ある教育プログラムの実施がほぼ一段落する1年次の冬にも調査を行い, 計3回の縦断データによる分析を試みる。

ただし, この検討は, 着目した教育プログラムの効果を測定することと同義ではない。そもそも, 調査対象校が特色ある教育プログラムを提供していることは, 地域の中学生や保護者にも一定程度知られており, そうしたプログラムへの参加を目指して当該高校を志望してきた生徒も少なくないことが想定される。すなわち, 特色ある教育プログラムへの参加を希望する生徒には, 入学当初から意欲が高い等の特徴があることも予想される。よって, 計3回の調査結果の分析においては, 時期による効果を含めた検討が必要である。その場合でもなお, 特色ある教育プログラムに参加した

生徒が1年次から2年次にかけて何らかの変容を見せたとして、それが当該プログラムのみによってもたらされた変容と断定できるものではない。当然、通常のカリキュラムによる教科等の学習経験をはじめ、所属学級の風土や対人関係等による心理社会的な影響等も多分に含まれていると考えられる。

こうした点に留意しつつ、特色ある教育プログラムへの参加生徒が、学習意欲の質という面で何らかの特徴をもつと想定される状況において、その特徴及び変容を簡易な調査方法によって捉えられるのかどうかの検討を試みるのが本稿の目的である。その上で、探索的ではあるが、特徴や変容を捉えられた場合にはその解釈可能性についても可能な限り考察を試みることにする。

## 2. 方法

### (1) 調査時期

202x年7月（1年次・夏）、202x+1年2月（1年次・冬）及び202x+1年7月（2年次・夏）。

### (2) 調査対象

都市部にある全日制高等学校（202x年度の1年次）に在籍する生徒320（普通科280、自然科学系専門学科40；女子153、男子167）名。ただし、本稿における各分析においては、その分析ごとに必要な項目の回答データが揃っている対象者に限定されるため、各分析の対象となる人数はこれより少なくなる場合がある。

なお、この学校は例年8割以上の卒業生が4年制大学に進学している。自然科学系専門学科における先進的な探究活動の取組に定評がある。近年は普通科を含む全校的な探究活動が展開され、学校として育成を目指す資質・能力の中に内発的目標も位置づけられている。

今回、調査対象校が企画・実施している特色ある教育プログラムとして、希望する生徒が参加する6つのプログラムに着目する。その内容は、専門機関・施設の訪問・視察により研究者・技術者との交流を主な内容とする国内研修、海外の連携高校の生徒との国際共同研究、大学院生との交流によるキャリア支援企画等、いわゆるSTEAM教育の文脈において文理融合的・国際的な視点が盛り

込まれていることに特徴がある。なお、希望者が多数の場合、面談等による選考が行われるプログラムもある。また、いずれのプログラムも1年次（202x年度）の夏以降（特に夏季休業中～1月頃）に実施されたものである。

### (3) 調査内容

#### ①目標内容志向性に関する項目

伊田（2022）による4項目。教示文は「以下に、高校生活や進路についてAからDまで4つのタイプの意見が書かれています。今のあなた自身の感覚や状態に当てはまる程度をそれぞれ選択肢から選んでください」とし、選択肢は「5：とても当てはまる、4：少し当てはまる、3：どちらとも言えない、2：あまり当てはまらない、1：全く当てはまらない」とした。

各タイプの刺激文は以下の通りである。実際の調査票においては、各タイプの見出しは「タイプA」等の表示のみとし、具体的な「外発的目標志向」等の名称の表示はしていないが、以下はそれぞれ、タイプA「外発的目標志向」、タイプB「内発的目標志向」、タイプC「自由志向」、タイプD「模索志向」の刺激文である。

【タイプA】「できるだけ世間から高く評価されているところに進学したい。高校では受験突破に必要なことを重点的に学びたい。進学先では、本当にやりたいことを探して、それが勉強かサークルかバイトか、何になるかわからないけど、とにかく学生生活を充実させたい。そして社会的に地位の高い職業に就くか、自分で起業して、豊かな暮らしを実現したい。」

【タイプB】「できるだけ興味・関心のあることを深く学べるところに進学したい。高校では各教科のみならず探究活動にも積極的に取り組んで、そこで学んだことが進学先での学習や研究にも役立てられるようにしたい。将来は得意分野を活かし、世の中から必要とされる仕事に就いて誰かの役に立ちたい。そして、自分自身もさらに成長し続けたい。」

【タイプC】「進路選択には興味がない。高校3年間は好きなことをして自由に過ごし、結果として進学でも就職でもどちらになっても構わない。将来は、生きていくための最低限の収入が得られ

さえすれば良い。就職したら嫌なこともたくさんあると思うので、今のうちに好きなことをしておきたい。大人になる前の最後の時間である高校生生活を楽しみたい。」

【タイプD】「何となく進学しなければいけないと考えてはいるけれど、具体的に学びたいことや将来やりたいことがはっきりしているわけではない。高校での学習には自分なりに頑張っており組んでいるが、今のままで良いのか自信はない。とりあえず、最低限の課題はこなしていると思うので、いつかは興味・関心のあることが見つかるといいなと思う。」

なお、上記4項目について5段階で評定を求めた後、「上記4つのタイプの中で、自分に最も近いもの（当てはまる程度の選択肢の数字が大きかったもの）を1つ選んでください（もし同点のタイプが複数あった場合には、その中から直感で1つだけ選んでください）」との問いを設けているが、今回は分析に用いていない。

#### ②課題価値に関する項目

Ecclesらの課題価値の概念的枠組みに沿って、伊田（2022）において作成された興味価値、コスト（負の価値）、獲得価値、利用価値についての各1項目、計4項目。教示文は「〇〇高校での学びに関連して、以下の各質問に答えてください」とし（「〇〇」の箇所には調査対象校の校名が入っている。以下同様）、興味価値「〇〇高校での学びは『面白い』と感じる」、コスト「〇〇高校での学びは正直『負担が大きい』と感じる」、獲得価値「〇〇高校での学びを通して『なりたい自分』に近づいていると感じる」、利用価値「〇〇高校での学びは将来『役に立つ』と感じる」の4項目について、それぞれに当てはまる程度について5段階で評定を求めた。

選択肢は「5：とても当てはまる、4：少し当てはまる、3：どちらとも言えない、2：あまり当てはまらない、1：全く当てはまらない」とした。

#### ③その他

対象校における日常的な教育活動全般の効果検証等に関する資質・能力の獲得に向けた意欲等を測定する項目が含まれていたが、今回は分析対象としていない。

### 3. 結果

#### (1) 生徒の参加プログラム数

各生徒の参加プログラム数をTable 1にまとめた。生徒1人当たりの平均参加プログラム数は0.39であった。2要因分散分析の結果、学科( $F(1, 316) = 32.081, p < .001, \eta_p^2 = .190$ )と性別( $F(1, 316) = 5.954, p < .001, \eta_p^2 = .042$ )の主効果がそれぞれ有意であり、普通科よりも自然科学系専門学科の方が、そして男子よりも女子の方が有意に多かった。

Table 1 学科別・性別の参加プログラム数

学科	性別	なし	1つ	2つ	3つ	4つ	平均(SD)
普通	女	101	29	6	3	1	0.39(0.74)
	男	120	17	3	0	0	0.16(0.43)
専門	女	3	3	4	2	1	1.62(1.26)
	男	9	10	8	0	0	0.96(0.81)
計		233	59	21	5	2	0.39(0.73)

伊田（2023）では、性別及び学科によって目標内容志向性及び課題価値の得点が異なる傾向も見られて、今回、学科と性別で参加プログラム数に有意差が見られているので、本来であれば学科と性別も要因に含めて分析すべきところであるが、今回はプログラムに参加した人数が少なく、要因を増やして検討することには無理があるように思われる。また、参加プログラム数が3つ及び4つの人数が極端に少なく、このままでは分析しづらい。そこで、以降の分析では、いずれのプログラムにも参加しなかった生徒を「参加なし」群（233名）、1つのプログラムに参加した生徒を「1つ参加」群（59名）、そして2つ以上のプログラムに参加した生徒をまとめて「複数参加」群（28名）とし、これら参加度に時期の要因を含めて、3期間での比較を中心に検討を行う。

#### (2) 各項目の時期別・性別・参加度別の平均値

目標内容志向性4項目と課題価値4項目の計8変数について、時期ごとの平均値を参加度別に算出し(Table 2)、2要因分散分析を行った。

外発的目標志向については、時期と参加度の交互作用が有意となり( $F(4, 524) = 2.501, p < .05, \eta_p^2 = .019$ )、複数参加群において時期の単純主効果が見られ、1回目よりも2回目の方が有意に高かった。内発的目標志向については、時期の主効果( $F(2, 526) = 3.438, p < .05, \eta_p^2 = .013$ )と参加

度の主効果 ( $F(2, 263)=8.622, p<.001, \eta_p^2=.062$ ) がそれぞれ有意であり, 多重比較の結果, 1年次の冬より2年次の夏の方が有意に高く, また, 参加なし群より1つ参加及び複数参加群の方が有意に高かった。なお, 自由志向及び模索志向については, 交互作用及びいずれの主効果も見られなかった。

Table 2 特色ある教育プログラムへの参加度による目標内容志向性及び課題価値の平均値比較

	参加なし群 <i>n</i> =186~188	1つ参加群 <i>n</i> =54~55	複数参加群 <i>n</i> =24~25	全体 <i>N</i> =265~268
外発的	3.72 (1.07)	3.57 (1.22)	3.40 (1.15)	3.66 (1.11)
目 標	3.60 (1.18)	3.70 (1.21)	4.04 (1.02)	3.66 (1.17)
志 向	3.52 (1.14)	3.61 (1.00)	3.76 (1.16)	3.56 (1.11)
内発的	4.16 (0.91)	4.54 (0.72)	4.60 (0.76)	4.27 (0.88)
目 標	4.07 (0.94)	4.17 (1.06)	4.48 (0.71)	4.13 (0.95)
志 向	4.12 (0.93)	4.50 (0.80)	4.72 (0.46)	4.25 (0.89)
自 由	2.26 (1.19)	2.13 (1.13)	2.32 (1.41)	2.24 (1.20)
志 向	2.48 (1.30)	2.22 (1.27)	2.12 (1.13)	2.40 (1.28)
	2.33 (1.15)	2.04 (1.03)	1.84 (1.03)	2.23 (1.12)
模 索	3.28 (1.43)	3.07 (1.46)	2.88 (1.76)	3.20 (1.47)
志 向	3.45 (1.43)	3.07 (1.50)	3.24 (1.64)	3.35 (1.47)
	3.22 (1.44)	3.11 (1.49)	2.84 (1.60)	3.16 (1.47)
興 味	3.76 (0.93)	4.04 (0.89)	4.29 (1.04)	3.86 (0.95)
価 値	3.18 (1.13)	3.56 (1.04)	3.92 (1.14)	3.32 (1.13)
	3.32 (1.06)	3.52 (1.04)	3.96 (0.95)	3.42 (1.06)
コ ス ト	3.35 (0.98)	3.04 (1.00)	2.72 (1.10)	3.23 (1.02)
	3.71 (1.03)	3.58 (1.05)	3.60 (1.04)	3.67 (1.03)
	3.62 (0.99)	3.35 (0.91)	3.44 (1.12)	3.55 (0.99)
獲 得	3.28 (0.88)	3.45 (1.07)	3.38 (1.06)	3.33 (0.94)
価 値	2.92 (1.02)	3.13 (0.98)	3.08 (1.25)	2.98 (1.04)
	2.92 (0.92)	3.15 (1.01)	3.13 (1.19)	2.99 (0.97)
利 用	4.01 (0.84)	4.33 (0.70)	4.32 (0.90)	4.10 (0.83)
価 値	3.59 (1.03)	3.78 (0.99)	3.84 (1.07)	3.65 (1.03)
	3.69 (0.86)	3.89 (0.90)	4.28 (0.68)	3.78 (0.87)

上段:1年次・夏, 中段:1年次・冬, 下段:2年次・夏

興味価値については, 時期の主効果 ( $F(2, 526)=18.199, p<.001, \eta_p^2=.065$ ) と参加度の主効果 ( $F(2, 263)=7.246, p<.001, \eta_p^2=.052$ ) がそれぞれ有意であり, 多重比較の結果, 1年次の冬及び2年次の夏よりも1年次の夏の方が有意に高く, 参加なし群よりも複数参加群の方が有意に高かった。コストについては, 時期の主効果 ( $F(2, 530)=20.871, p<.001, \eta_p^2=.073$ ) が有意であり, 多重比較の結果, 1年次の夏よりも1年次の冬及び2年次の夏の方が有意に高かった。また, 参加度の主効果 ( $F(2, 265)=3.331, p<.05, \eta_p^2=.025$ ) が有意であり, 複数参加群が他の2群より低く見えるが, 多重比較の結果, 有意な差とまでは言えなかった。獲得価値については, 時期の主効果 ( $F(2, 528)=7.330, p<.001, \eta_p^2=.027$ ) が有意であり, 1年次の冬及び2年次の夏よりも1年次の夏の方が有意に高かった。利用価値については, 時期の

主効果 ( $F(2, 530)=16.541, p<.001, \eta_p^2=.059$ ) と参加度の主効果 ( $F(2, 265)=5.150, p<.01, \eta_p^2=.037$ ) がそれぞれ有意であり, 多重比較の結果, 3つの時期の間にすべて有意差が見られ, 1年次の夏が最も高く, 1年次の冬に最も低くなり, 2年次の夏がその中間に位置していた。また, 参加なし群よりも複数参加群の方が有意に高かった。

### (3) 同一項目の1年次~2年次間の相関係数

各項目について, 全体, 参加なし群, 1つ参加群, 複数参加群ごとに, 1年次の夏と1年次の冬, 1年次の冬と2年次の夏, そして1年次の夏と2年次の夏との間の相関係数を算出した (Table 3)。

Table 3 同一項目の1年次~2年次間の相関係数

項 目	1年次夏と 1年次冬	1年次冬と 2年次夏	1年次夏と 2年次夏
外 発 的	.316***	.464***	.443***
目 標 志 向	.320***	.441***	.447***
	.275*	.403**	.437***
	.552**	.780***	.580**
内 発 的	.242***	.390***	.379***
目 標 志 向	.194**	.387***	.343***
	.308*	.347*	.391**
	.443*	.428*	.383*
自 由 志 向	.315***	.410***	.261***
	.286***	.420***	.244***
	.423**	.384**	.188
	.342†	.268	.553**
模 索 志 向	.441***	.562***	.449***
	.383***	.551***	.431***
	.438***	.477***	.226†
	.774***	.794***	.909***
興 味 価 値	.497***	.612***	.468***
	.419***	.568***	.419***
	.611***	.652***	.536***
	.653***	.757***	.502***
コ ス ト	.336***	.456***	.289***
	.352***	.432***	.309***
	.227†	.466***	.125
	.408*	.586**	.296
獲 得 価 値	.272***	.428***	.352***
	.280***	.460***	.324***
	.226†	.187	.347**
	.270	.607**	.466*
利 用 価 値	.318***	.585***	.290***
	.280***	.617***	.269***
	.319*	.576***	.399**
	.489*	.295	.000

†  $p<.10$  \*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$  \*\*\*  $p<.001$

1 段目: 全体 ( $N=282, 267\sim 270, 288\sim 291$ )

2 段目: 参加なし群 ( $n=202, 188\sim 190, 202\sim 204$ )

3 段目: 1つ参加群 ( $n=55, 54\sim 55, 58\sim 59$ )

4 段目: 複数参加群 ( $n=25, 24\sim 25, 27\sim 28$ )

全体で算出した相関係数を見ると, いずれの項目も3つすべての時期の組合せで有意な正の相関 ( $r=.261\sim .612$ ) が見られた。時期としては, 1年次の冬と2年次の夏との相関がやや強めであるが, 外発的目標志向や内発的目標志向及び獲得価値など, 1年次の夏と1年次の冬との相関よりも, 時間間隔の長い1年次の夏と2年次の夏との相関の方が強い項目も見られた。

参加なし群と1つ参加群及び複数参加群ごとの相関係数を見ると、ほぼ正の相関が見られている点は共通しているが、項目によっては相関の程度がやや異なっている。例えば、外発的目標志向や模索志向においては特に複数参加群の相関が他の群より相対的に高めであり、興味価値においても1つ参加群と複数参加群の相関がやや高めである。また、1つ参加群及び複数参加群においては、有意な相関が見られない組合せが散見された。具体的には、自由志向、コスト、獲得価値、利用価値の一部であるが、いずれも時期によって相関が有意であったりなかったりする。この点については、一つ参加群と複数参加群は人数が少ないため、相関係数の信頼区間が広めになることも踏まえつつ、平均値の推移も手掛かりに、天井効果等にも留意しながら考察する必要がある。

(4) 同一時点での目標内容志向性と課題価値との相関係数

1年次の夏、1年次の冬、2年次の夏の時点における目標内容志向性と課題価値との相関係数を、全体、参加なし群、1つ参加群、複数参加群についてそれぞれ算出した（Table 4～7）。

まず、全体での相関（Table 4）を見ると、コスト以外のポジティブな課題価値との間に一貫して正の相関が見られたのは内発的目標志向であった。弱い相関の範囲内ではあるが、1年次の夏から冬にかけて相関が弱まった後、2年次の夏には1年前の相関と同程度かそれ以上に強まっているように見える。それに対して、外発的目標志向は、1年次の夏の時点では極めて弱いながらも有意な正の相関がポジティブな課題価値との間に見られていたが、2年次の夏の時点では有意な相関が見られなかった。自由志向は、1年次においてネガティブな課題価値であるコストとの間に正の相関が、また、利用価値との間には負の相関が見られるが、2年次にかけてその程度は弱まり、新たに興味価値との間で弱い負の相関が有意となった。模索志向については、1年次の夏においてコストとの間に正の相関、獲得価値との間に負の相関がそれぞれ有意であったが、1年次の冬には弱まった。そして2年次の夏において獲得価値との間に再び有意な負の相関が見られたものの、1年次の夏より

弱いものであった。なお、参加なし群（Table 5）の相関は、人数的に全体の7割以上を占めていることから、全体での相関と似た傾向となった。

Table 4 同一時点での目標内容志向性と課題価値との相関係数（全体）

	興味 価値	コスト	獲得 価値	利用 価値
外 発 的 目 標 志 向	.112*	.102	.123*	.114*
	.095	-.019	.172**	.056
	.048	.006	.040	.069
内 発 的 目 標 志 向	.246***	-.072	.216***	.371***
	.229***	.012	.168**	.217***
	.301***	-.110†	.296***	.370***
自 由 志 向	-.088	.216***	-.026	-.130*
	-.046	.154***	-.051	-.127*
	-.134*	.129*	-.061	-.071
模 索 志 向	-.109†	.148**	-.235***	-.066
	.006	.035	-.104†	-.012
	-.112†	.060	-.129*	-.020

†  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$   
 上段：1年次の夏（ $N=316$ ），中段：1年次の冬（ $N=284$ ），  
 下段：2年次の夏（ $N=288\sim 290$ ）

Table 5 同一時点での目標内容志向性と課題価値との相関係数（参加なし群）

	興味 価値	コスト	獲得 価値	利用 価値
外 発 的 目 標 志 向	.117†	.135*	.131*	.183**
	.027	-.113	.131†	-.026
	.034	.000	-.002	.108
内 発 的 目 標 志 向	.190**	-.012	.199**	.339***
	.224**	-.033	.165*	.255**
	.312**	-.111	.299**	.372**
自 由 志 向	-.050	.202**	-.020	-.130*
	-.018	.165*	-.034	-.138*
	-.106	.071	.003	-.022
模 索 志 向	-.045	.084	-.172**	.041
	.090	.009	-.035	.080
	-.123†	.004	-.121†	-.041

†  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$   
 上段：1年次の夏（ $n=229$ ），中段：1年次の冬（ $n=204$ ），  
 下段：2年次の夏（ $n=204\sim 205$ ）

1つ参加群（Table 6）は、1年次の夏の時点において、内発的目標志向と利用価値との間に有意な正の相関が見られるが、1年次の冬においては、外発的目標志向と獲得価値との間に有意な正の相関が見られ、興味価値及び利用価値との間にも弱い正の相関が見られるようになった。そして2年次の夏では、内発的目標志向と獲得価値との間に有意な正の相関が、また、利用価値との間にも再び弱い正の相関が見られた。加えて、外発的目標志向と利用価値との間には弱い負の相関が見られた。また、1年次の冬には、自由志向と興味価値及び獲得価値との間に弱い負の相関が見られた点

において、複数参加群と異なっている。そして、模索志向と獲得価値との相関についても、1年次の夏から冬にかけては負の相関が見られていたが、2年次の夏には見られなくなった。

Table 6 同一時点での目標内容志向性と課題価値との相関係数 (1つ参加群)

	興味 価値	コスト	獲得 価値	利用 価値
外 発 的 目 標 志 向	.213	-.052	.012	-.037
	.229 <sup>†</sup>	.186	.357**	.227 <sup>†</sup>
	-.109	.029	-.021	-.221 <sup>†</sup>
内 発 的 目 標 志 向	.200	-.079	.161	.263*
	.193	.170	.156	.127
	.173	-.049	.340**	.252 <sup>†</sup>
自由志向	-.096	.197	-.040	-.057
	-.243 <sup>†</sup>	.162	-.229 <sup>†</sup>	-.141
	-.077	.127	-.180	-.091
模索志向	-.154	.162	-.423***	-.225
	-.215	.080	-.252 <sup>†</sup>	-.142
	-.033	.273*	-.080	.144

<sup>†</sup>  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

上段: 1年次の夏 ( $n=59$ ), 中段: 1年次の冬 ( $n=55$ ), 下段: 2年次の夏 ( $n=57\sim 58$ )

Table 7 同一時点での目標内容志向性と課題価値との相関係数 (複数参加群)

	興味 価値	コスト	獲得 価値	利用 価値
外 発 的 目 標 志 向	.167	.000	.430*	.097
	.181	.369 <sup>†</sup>	.062	.312
	.370 <sup>†</sup>	.097	.360 <sup>†</sup>	.226
内 発 的 目 標 志 向	.472*	-.225	.327 <sup>†</sup>	.573**
	.127	.045	.168	-.004
	.000	.150	-.036	.163
自由志向	-.315	.346 <sup>†</sup>	-.005	-.203
	.394 <sup>†</sup>	-.028	.258	.120
	-.172	.422*	-.151	-.094
模索志向	-.295	.407*	-.210	-.399*
	-.062	.083	-.241	-.358 <sup>†</sup>
	-.081	.028	-.228	-.126

<sup>†</sup>  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

上段: 1年次の夏 ( $n=28$ ), 中段: 1年次の冬 ( $n=25$ ), 下段: 2年次の夏 ( $n=27\sim 28$ )

複数参加群 (Table 7) では、1年次の夏において外発的目標志向と獲得価値との間に、そして、内発的目標志向と興味価値及び利用価値との間にそれぞれ有意な正の相関が見られたが、1年次の冬及び2年次夏では有意な相関が見られなかった。1年次の冬に外発的目標志向とコストとの間に正の相関が見られ、2年次の夏には、外発的目標志向と興味価値及び獲得価値との間に正の相関が見られるようになっている。また、1年次の夏においては自由志向及び模索志向とコストとの間に正

の相関が見られていたのが、1年次の冬にはそれが見られなくなる一方で、今度は自由志向と興味価値との間に正の相関が見られるようになり、同時に外発的目標志向とコストが正の相関を示している。そして、2年次の夏では自由志向とコストとの間に再び正の相関が見られた。加えて、1年次の夏から冬にかけて模索志向と利用価値との間に負の相関が見られていたのが、2年次の夏では見られなくなった。

#### 4. 考察

##### (1) 平均値の比較による参加生徒の特徴把握

本稿の目的は、特色ある教育プログラム参加生徒の特徴把握がこの簡易な調査方法によって可能かどうかを検討することにあつた。平均値についての分散分析の結果、自由志向と模索志向及び獲得価値を除く5項目において、参加度の主効果あるいは参加度の要因を含む交互作用が有意となったことから、少なくとも学習意欲の質という視点から参加生徒の特徴やその変容を把握することができたとと言える。

問題と目的において述べたように、この特徴把握が、必ずしも教育プログラムの効果測定と同義ではない点に留意しなければならないが、測定の時期という要因に着目すると、自由志向と模索志向以外の6項目において、主効果ないし交互作用が有意であった。特に交互作用が有意であった外発的目標志向では、複数参加群における時期の単純主効果が見られており、1年次の夏よりも1年次の冬の方が有意に高かったことから、参加したプログラムの影響を受けている可能性も示唆される。

一方で、参加度の主効果が見られた項目では、参加生徒の方が内発的目標志向やポジティブな課題価値が高い傾向にあつたものの、時期としては1年次の夏においてすでに参加生徒の方が高い面があり、特色ある教育プログラムの効果以前に、当初から意欲的な生徒がプログラムへの参加を選択したという面があることについて明確になったように思われる。

以下、各項目の平均値、同一項目間の相関係数及び目標内容志向性と課題価値との相関係数の時

系列的推移を手かかりとして複数参加群と1つ参加群の特徴について検討する。

## (2) 「複数参加」群の特徴

複数参加群の特徴としては、1年次の夏から2年次の夏に至るまで一貫して内発的目標志向が高いことが挙げられる (Table 2)。このことは相関係数の高さ (Table 3,  $r=.552\sim.780$ ) から読み取ることができ、特に1年次の夏と1年次の冬の相関が他の群よりもやや強いように見える。すなわち、入学当初の内発的目標の高さが1年次の冬も比較的維持され、それが2年次の夏まで続いている複数参加群の特徴と言える。

内発的目標志向は全体的に見ればポジティブな課題価値との正相関が見られるところであるが、この複数参加群においては1年次の冬以降において内発的目標志向と課題価値との間に有意な相関が見られていない (Table 7)。2年次の夏については、内発的目標志向の高まり (平均 4.72,  $SD=0.46$ ) による天井効果による部分があるかもしれないが、1年次の冬については天井効果では説明がつかない。

ここで注目されるのは、1年次の冬において複数参加群のみ外発的目標志向が高まっていることである (Table 2)。また、外発的目標志向とコストとの正の相関がこの時期にのみ現れているが (Table 7)、コスト自体もこの時期に上昇が見られる (Table 2)。因果関係を特定するのは困難であるが、特色ある教育プログラムへの参加に伴い、心理的な負担感が増し (コストの上昇)、元からの内発的目標志向だけでは意欲の維持が難しくなり、プログラムに参加していることそれ自体の希少性 (名声) や参加者として選抜されたこと (成功) など、外発的目標志向を高めて課題を乗り越えようとしていた可能性が考えられる。

もう1つ注目しておきたいのは、この1年次の冬に、自由志向と興味価値との間に正の相関が見られていることである (Table 7)。自由志向の得点自体は元から低い水準であるが、興味価値は高い水準にありつつもこの時期にやや低下が見られている (Table 2)。高校生活を楽しまたいという気持ち (自由志向) が高校での学びそれ自体の楽しさ (興味価値) を感じる方向に昇華されたのか

もしれない。ただし、2年次の夏には、自由志向と興味価値との相関は見られなくなり、再びコストとの正の相関が現れていることと、自由志向自体は低い水準のまま推移していることから、その後の学習意欲の質が自由志向を軸に再構築されたとはまでは言えなさそうである。

まとめると、複数参加群の生徒においては、内発的目標志向を高い水準で維持しつつ、1年次の冬までの間の様々な教育プログラムの経験等を通して外発的目標志向が加わり、その中でポジティブな課題価値を維持・高揚させるという形で、自己決定理論の有機的統合理論 (Ryan & Deci, 2002) で言うところの「統合的調整」が促進されたのかもしれない。その前提として、1年次の夏の時点では心理的な負担感 (コスト) が比較的小さく、教育プログラムへの参加に伴う負荷を受けとめる余力があったことも複数参加群の特徴と言えよう。

## (3) 「1つ参加」群の特徴

1つ参加群においても複数参加群と同様に、参加なし群と比較して内発的目標志向が高い点に特徴があると言える。ただし、1年次の冬において複数参加群に見られたような外発的目標志向の高まりは見られなかった。また、ポジティブな課題価値についても、複数参加群が参加なし群より興味価値と利用価値が有意に高かったのに対して、1つ参加群は他の2群との間に有意差が見られず、得点としては中間的な位置にあると言える。すなわち、1つ参加群では、複数参加群のような外発的目標志向の一時的な高まりなど平均値の時系列的な比較から明確な変化が見られたわけではなく、また、項目の得点それ自体は参加なし群に近い部分も見られる。

しかしながら、相関係数の推移からは、1つ参加群においても1年次の冬を挟んで学習意欲の質に何らかの変容があった可能性が示唆され、その中ではやはり外発的目標志向が何らかの役割を果たしているように見える。具体的には、Table 6にあるように、1年次の冬において外発的目標志向とポジティブな課題価値 (特に獲得価値) との間に正の相関が現れるが、2年次の夏には再び有意な相関が見られなくなった代わりに、内発的目標志向と獲得価値との間に有意な正の相関が見られ

ていることが挙げられる (Table 6)。複数参加群と類似したロジックとして、プログラムに参加していることそれ自体の希少性 (名声) や参加者として選抜されたこと (成功) を高校での学びの価値づけに結びつけ、一時的に負荷のかかった状態を乗り切ろうとした可能性も考えられる。それでも、あくまで軸足は内発的目標志向に置かれ、それが高校での学びの価値づけにつながっている点は複数参加群と異なる特徴のようにも見える。ただし、複数参加群は内発的目標志向が極めて高い水準にあるので、天井効果により価値づけとの相関が見えづらくなっている可能性も考慮すべきであり、1 つ参加群と複数参加群の違いを「内発が軸か、外発が軸か」という対照的な形で捉えてしまうことは避けた方が良好だろう。

#### (4) 本研究の成果と限界及び今後の課題

今回は3時点での縦断データから、簡易な調査方法であっても生徒の特徴等を捉えられる可能性が示唆された。しかしながら、それぞれの特色ある教育プログラムにおける直接的な効果測定 (各プログラムにおける成果のパフォーマンス評価等) との関連については検討されていないため、教育プログラムへの参加以外の要因がもたらす影響が含まれた数値である点に留意が必要である。

また、1 つ参加群及び複数参加群については人数が相対的に少なく、平均値の比較や分割相関の解釈において難しさがあった。特に分割相関から群の特徴を描く際には、群内においても個人差があることが前提となるため、複数の学校を対象とした十分なサンプルサイズが得られる調査による継続的な検討も今後の選択肢になるだろう。

#### 引用文献

Duriez, B., Luyckx, K., Soenens, B., & Berzonsky, M. D. (2012). A process-content approach to adolescent identity formation: Examining longitudinal associations between identity styles and goal pursuits. *Journal of Personality, 80*, 135-161.

<https://doi.org/10.1016/j.cedpsych.2020.101859>  
Eccles, J. S., & Wigfield, A. (2020). From expectancy-value theory to situated expectancy-value theory: A developmental, social cognitive, and sociocultural perspective on motivation. *Contemporary Educational Psychology, 61*, Article 101859.

伊田勝憲 (2018). 高校生の学習意欲の質を捉える簡易な質問紙開発の試み 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学篇), *69*, 163-174.

伊田勝憲 (2022). 高校生の目標内容志向性と課題価値の関係: 簡易な調査方法による検討の試み 立命館実践教育研究, *4*, 65-74.

伊田勝憲 (2023). 高校1年次から2年次にかけての目標内容志向性と課題価値の回答の安定性: 簡易な調査方法による縦断的検討の試み 立命館実践教育研究, *5*, 53-62.

Oyserman, D. (2007). Social identity and self-regulation. In A. W. Kruglanski & E. T. Higgins (Eds.), *Social psychology: Handbook of basic principles* (2nd ed., pp. 432-453). New York, NY: Guilford Press.

Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2002). Overview of self-determination theory: an organismic dialectical perspective. In E. L. Deci, & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination theory* (pp. 3-33). Rochester: The University of Rochester Press.

Vansteenkiste, M., Lens, W., & Deci, E. (2006). Intrinsic versus extrinsic goal contents in self-determination theory: another look at the quality of academic motivation. *Educational Psychologist, 41*, 19-31.

#### 付記

本研究は JSPS 科研費 JP20K03379 の助成を受けたものである。